

運動感覚知の公道化

金子 明友

本論は平成一四年五月二六日、東京女子体育
大学で行われた運動伝承研究会の基調講演の
草稿と講演レジュメとを基にして、更に、詳
しい説明を加えながら再編したものである。

今なぜ伝承論なのか

I 運動伝承論の源流

今ここに運動伝承論と題して、二〇年この方、私ひそかに育
んできた運動理論の構想を述べるに先立ち、半世紀以上に
及ぶ教員生活に終止符を打った今、こんなにとくさんの仲
間がわたしの基調講演に駆けつけていただいたことに対し
て、まずもって心から感謝を申し上げたいと思います。懐
かしいみなさんにお会いできたことはほんとうに嬉しいか
ぎりです。

まず始めに、どのようにして、わたしが運動伝承に関心

をもち、それを一生の仕事にするに至ったかをかいつま
んでお話ししておきたいと思えます。発生運動学、より厳密
に表現すれば、キネステーズ発生論を基底に据えたこの実
践的な運動学の構想は、ドイツのクルト・マイネル教授によ
る、唯一のライフワークであった大著『運動学—教育学的
視座に基づくスポーツ運動理論の企て』(Bewegungslehre,
*Versuch einer Theorie der sportlichen Bewegung unter
pädagogischem Aspekt*, 1960) を起点としております。しかし、
後でも触れますが、マイネル教授の運動学初版の訳業(1981, 大
修館を江湖に送り出した後も、実は何か奥歯に物が挟まった
ような、その論理の歯切れの悪さが気になっていたのです。

数年越しの暗中に模索する苦悩を経て、やっと、マイネル教授の運動文化伝承への熱い思いに気づくことができたわけです。そのためには、マイネル教授がその共産圏という地理的環境から余儀なくされたであろう、その唯物論的イデオロギーを括弧に入れてみなければなりませんでした。

その上で、人間の行為としての運動理論を厳密に検討し直し、人間のもつ運動文化伝承という事実そのものに立ち返ってみる必要がありました。彼の論述の背後に遠のいていた運動文化の伝承理論を前景に立てながら、現象学的、形態学的立場をとるためには、改めて、本質的な運動学の理論的基礎づけを提供してくれるベルクソン、フッサール、ヴァイツゼッカー、ポイテンデイク、シュトラウスやさらにメルローポンティイらの厳密な運動理念を尋ねざるをえなくなつたのです。こうして、これらの形而上学的、人間学的、現象学的な厳密な分析に基づく運動理論を慎重に検討してみても、それが単に理論を弄ぶ思弁的な形而上学などではなくて、スポーツや舞踊の運動実践の伝承現場にも、極めて重要な基礎を提供していることに気づいたわけです。

その運動伝承の基礎理論は、たとえば、ベルクソンの純粹持続 (*durée pure*) の運動論、フッサールの発生現象学の身体論 (*Somatologie*) に基づく感覚論的運動分析論 (*ästhetologische Bewegungsanalytik*)、さらにフッサールの身

体論を發展させたメルローポンティイの運動性の感覚論的分析 (*analyse esthologique de la motricité*) やヴァイツゼッカーの『ゲシュタルトクライス』としての運動形態の発生論 (*Genetik der Bewegungsform*)、さらにポイテンデイクの機能運動学 (*funktionelle Bewegungslehre*) における運動発生論 (*Genetik der menschlichen Bewegung*) や力動類型論 (*dynamische Typologie*) など、われわれの運動文化の伝承研究にも、その実践の方法論にも不可欠な基礎を形成しているものなのです。それらは、われわれ運動実践の現場で日常的に経験している生き生きした運動の生命的現象 (*lebendige Lebenserscheinungen*; Bytendijk, 1932) そのものなのであり、それなしには、われわれの日常生活における基本的な運動も、スポーツの妙技も成立しないほど本質的な出来事なのです。残念ながら、わが国のこれまでの運動研究においては、それらは単なる個人的な運動体験の記述であり、客観性に乏しい単なる感覚印象だとして、運動学の問題圏から排除されてきたのです。ですから、今ここに生き生きと体験される運動感覚世界 (*kinästhetische Welt*) は、われわれが日常的に運動実践のなかで、へ私の身体が率直に了解していることなのであって、上に挙げた世界一流の哲学者、心理学者や生理学者から初めて知り得たという新しい事柄ではないのです。ただ、それらの現象学、形態学、あるいは人間学

の厳密な理論形成に基づいて、われわれの主観的な運動体験が厳密な学問の形式を備えた人間学的運動学として成立する根拠を与えてくれたことはいまでもありません。マインエル教授がその実践的運動学の基底をなすものとして、科学的な運動研究者から非科学的だと非難されても、執拗なまでに主張しつづけたモルフォロギイ的運動分析論は、実は、現象学的な運動感覚論(Kinästhetik = Kinästhesiologie)が基底に据えられ、その著書の至る所で「私の動キネステゼ 感能力」(meine kinästhetische Vermöglichkeit)の不可欠さを示唆しているのは、慎重な読者は気づいているはずで、その源流は、われわれの伝承理論の心柱となるゲシュタルトクライスという運動形態の発生論を創設したヴァイツェンッカーが賞賛して止まらなかったゲーテのモルフォロギイ思想にまで遡ることになることは、これまでの私のいくつかの研究論文で取り上げて検討してきました。もちろん、私は神経生理学者でもなければ、哲学を専攻しているわけでもありませんから、国際的なそれらの専門的研究に明るいわけではないですし、デジタルテクノロジーに支えられたロボティクスの先端的運動分析に特別な関心をもっているわけでもありません。またその気もないのは発生論的運動分析に関心をもつ者としては当然のことでもあります。たしかに私は馬齢を重ねて喜寿を目前にしてはいますが、運動の発生と伝

承に対して、極めて強い関心を持ち、常に自らのキネステーズ能力が衰えないように、つまり、キネステーズの生体(Beseelen)に腐心している一介の運動指導者を任じており、その限りでは人後に落ちないと自負しているつもりです。

運動伝承の実践現場に生きるわれわれが切迫感とともに関心をもつのは、運動を覚える人の深層次元における運動意識の発生様態であります。運動指導者として、学習者の体験流に潜入でき、その運動感覚キネステゼの深層で活発に交信しながら、学習者の運動発生をどのように促していくことができるのかといった、生き生きとしたその実存運動(movement de l'existence)の運動形成と促発分析に実践的に関わっていくことこそ、運動指導の中核的関心事になるのです。ですから、いたずらに哲学的な原理や科学的法則の解明のみに立ち入ろうとするわけではありません。しかし、われわれが運動学というとき、ニュートン以来の精密科学的な運動概念が血肉化されていて、その先入見の呪縛から容易に脱け出せないのも事実です。まずもって、われわれは、運動伝承を支える発生論的な人間学的運動学が機械論的な科学的運動学とは全く別種の運動理論であることを確認しておくことを忘れるわけにはいけません。

しかし、このように言明したとしても、われわれはこの区別になかなか納得しにくいことがあるのも事実のようにで

す。因みに、われわれが發生運動学の實踐的立場をことさらに標榜すると、精密科学的に運動研究をしている人も、負けじとその研究成果を誇示し、その實踐性を声高に主張します。しかしそこには、「実践的」という表現の理解に差があるようです。マイネルが「実践的經驗」(praktische Erfahrung)や「実践的思考」(praktisches Denken)というときの「実践的」はギリシア語の *praitin(tun, to do)* を語源的意味で使っています。同様にして、人間学的運動学でも、實踐を「私は動けるようになる」という動キネティック感能力の發生論的意味で理解します。それに対し、精密科学的運動学では、運動メカニズムの解明に役立ち、指導にも役立つと理解して、その有用性を前面に出して考えているようです。その限りにおいては、生理学も、栄養学も、さらに教育学も指導實踐に貢献し、不可欠な知見を提供してくれるのはいうまでもありません。

この二つの運動学ともに、その研究の成果が現場の指導實踐に役立つことには変わりがないのですが、その運動認識論も、その分析方法論も研究の対象領域も異なるのです。つまり、人間学的運動学のねらいは学習者の「私の運動」における運動感能力の發生そのものの解明にあり、科学的運動学のねらいは「客観的運動」の法則的メカニズムの解明にあります。ですから、「解剖学や生理学によって、消化が

がすすみ、運動ができるようになるのではないのだ」(Wissenschaft der Logik, S. 14)という哲学者ヘーゲルの言葉を思い出すだけで、両者の違いは十分に理解できると思います。動キネティック感能力の發生論を主題とした実践的な運動学、たとえば、マイネルのモルフオロギー的運動学と、精密な計測を基礎とする自然科学的な運動学、たとえば、ドンスコイのバイオメカニクスの運動学との間には、全く分析の対象領域が異なることをはつきり區別して理解しなければなりません。しかしながら、運動キネシオロギー感覺論的モルフオロギーの本質を十分に理解しようともせず、そこに共通に横断できる一般理論を統合理論として安易に企図しようとする傾向がないわけではありません。あるいは、科学主義に入れ込んで、一方だけに階層的に還元できるはずだと主張するような、この種の議論は不毛な混乱としか言いようがないのです。この二つの運動学は、ヴァイツゼッカーがゲシュタルトクライスと名づけた生物学的な運動發生論の冒頭において、明確に断っているのと全く同様に、運動認識に関して、異種性(Andersartigkeit)と独自性(Eigenartigkeit)の慎重な検討を経て明確に區別されるべきだろうと思います。

ところで、われわれの伝承論の直接の起点となったマイネル教授の唯一の著書に初めて出会ったのは、忘れもしない一九六〇年一〇月九日の西ベルリンのホテルにおいてで

した。ローマオリンピックで初優勝した日本体操チームの演技会が開催されたのを機に、私個人にライブツイヒまで足を伸ばして欲しいという招待状をもって、ライブツイヒ大学の友人がわざわざホテルまで訪ねてきてくれたのです。そのときの運動研究やトレーニング方法論に関する討論の記念として、出版間もないマイネル教授の大著『運動学』を贈ってくれたのです。それから、もう四〇年以上の歳月が流れました。しかし、マイネル教授の「実践的経験」の伝承を基底に据えたモルフオロギー的運動学に込められた真意は、かならずしも十分に伝わっているとは言いがたいようです。その責任の一端は、もちろん訳者である私にあります。しかし、レーニン・マルキシズムに彩られた弁証法的唯物論一辺倒だった当時の東ドイツにおける特殊な事情を考えれば、思想的に自由な日本で、共産思想がちりばめられた運動学の訳書を上梓するには、当然ながら多くの困難に見舞われざるをえなかったのです。恩師の故岸野雄三先生は、「斬新なスポーツ運動学ではあるが、西欧圏の碩学ヴァイツゼッカーやボイテンディクを激しく批判し、東側の共産思想をあからさまに鼓吹しているから、マイネルの運動学の翻訳は日本の現状からみて、きわめて危険だと思う」と注意されたほどでした。

しかしながら、マイネル教授の唯一のライフワークを注

意深く読み解いていくうちに、その運動実践 (Bewegungspraxis) を前面に押し出し、運動指導が感覚世界 (ästhetische Welt) から遊離することを厳しく戒めたユニークな運動学構想に惹かれるようになっていきました。やつとこのことで、マイネル自身の初版(1960)『運動学』の訳書を江湖に送り出したのは、残念ながら、マイネル教授世界の数年後であったのです。感覚論を基底に据えた運動形態学 (ästhetologische Bewegungsmorphologie) をキーワードにしたマイネルの実践的運動学が、それまでのマネジメント的な運動指導の方法論に大きな変革を迫ったのは、何といっても、運動の形態発生 (Formgenese der Bewegung) を主題化した運動伝承の理論体系だったからです。蛇足ながら一言付け加えておきますが、このマイネル教授の意味する「形態発生」とは、たとえば、「背面跳び」とか「へっぺり」といった技、つまり、習練の対象になるキネグラムの一連の運動経過の新たな成立だけが意味されているのではないのです。大切なのは、その技の生成を支えている運動感覚図式 (kinästhetisches Schema) の成立なのです。マイネルが、共産圏の著作らしく、エンゲルスの『自然の弁証法』(Dialektik der Natur) やマルクスの『資本論』(das Kapital) における技能伝承の論考を引用しながらも、一貫してヴァイツゼッカーのいう反論理 (Antilogik) の原理を肯定せざるをえない「実

実践的思考やへ実践知に多大の関心を寄せていたことをわれわれは十分に読み取ることができはざずです。それはモルフオロギー的運動分析論(*morphologische Bewegungsanalyse*)として、へ私の運動の「自己観察」、ないしへ他者運動の共感的な「印象分析」に特徴的に示されているからです。

それらの感覚論的な運動分析は、科学的な運動分析とは全く違っていて、観察者の感覚印象の能力やその生身に息づいている有体的な経験知に依存しているのです。だからこそ、そこに訓練可能性(*Trainierbarkeit*)を認め、運動の感性教育の重要性を指摘しているのです。それは特に、没後二〇年にして発見されたマイネル教授の遺稿集(『動きの感性学』1988、大修館)に詳しく述べられていますから参考にしてください。こうして、われわれの運動伝承論の研究意図は、マイネル教授のモルフオロギー的な実践運動学を起点として、人間の生き生きとした実存世界における運動感覚能力性(*kinästhetische Vermöglichkeit*)、約言すれば、動キネマティック感能力の発生分析や構造分析を通して、われわれ人間社会にとつて貴重な運動文化の伝承実践に貢献しようとするところにあります。

II 伝承の意味構造

伝承とは、字義通りに、何か価値あることをへ伝え、へ承

けるという二項関係の営みであることは言うまでもありません。つまり、伝え手と受け手という人間の関係系のなかで、何か価値あることが伝承されることとなります。その何かは、仏像や工芸品のようなものであったり、それを創り出す無形の実験的経験知、ないし、それへの道しるべ(*meta-hodos* = *Methoden*)になります。われわれの運動伝承においては、運動のかたちも、動く感じも、一回性原理に支配され、刻々に流れ去っていくので、有体的な動きかたそれ自体を伝承するには多くの困難が待ちかまえていることはいうまでもありません。ですから、これまでは、運動発生の周辺の条件、つまり、「客観身体」(*corps objectif*)を動かすために有利な生理学的、物理学的な諸条件や、心理学的な有利な構え、あるいは教育学的な学習の手順や道しるべなどが主題化されてきました。いわば、運動を身につける人、つまり、運動を習得しようとする選手や生徒を外側から客観的に考察し、それに有効な共通項だけを伝承の研究対象にしてきたわけです。こうして、運動を身につける本人が、へ私の運動を創発するときの体感(*das koenästhetische*)やコツ、カンといったへ創発能力の核心部分を厳密に発生分析すること、並びに、受け手の運動発生を伝え手がしっかり責任もって保証してやれるへ促発能力の発生様態を解明することは、「すべて不立文字」なのだから、自ら工夫して

自得するしかないのだ」という伝統的な芸道の美意識に押さえ込まれてきたようです。このままでは、運動研究は、伝承の周辺の条件の整備に科学的データを収集するのに汲々として、肝心の運動伝承の内実の解明はブラックボックスに入れられたまま放置されることになり、いつも学習者本人にすべて丸投げされてしまうことになります。こうして丸投げされた生徒や選手は、全て自らの運動感覚だけを頼りに、新しい運動感覚図式を発生させなければならぬのですから、その自得の苦しみを身をもって憶えている人は少なくないのではないのでしょうか。われわれの運動伝承論の研究意図は、まさにこの運動発生ブラックボックスの深層にまで立ち入って、その促発方法論を新しく構築しようとしているのです。

伝承という表現は、国語辞典的理解(広辞苑)では、古来の制度、信仰、習俗、口碑(昔話)、伝説などを伝え、受け継ぐ営みが意味されています。この日本語の表現は、伝え手と受け手の二項関係が表され、その意味構造が的確に示されていることは特筆に値すると思われます。因みに、ここでいう意味構造は、伝承という表現の「意味構造」(Sinnstruktur-Bedeutung)だけでなく、同時に「感覚構造」(Sinnesgestalt-Husserl)も表せる Sinn という語に注目しておきたいと思います。だから、へ伝くとへ承とという二項関係の意

味構造は、同時に運動感覚ゲシュタルトを基底に据えた二項関係のへ感覚意味構造に理解することができるとです。シュトラウスの名著『感覚の意味』(Vom Sinn der Sinne 1935:1956)は、この意味において極めて奥が深いと言わざるをえないようです。

一方、西欧語においては、語源的にもへ伝とへ承の二項関係の表現は一語として成立しにくいようです。ギリシア語の(Paradosis)は(から+分け与える)はへ伝授の意味が前面に立ち、ラテン語の(Tradere) <transmittere>(向こうへ与え、送る)も師匠から弟子へ、伝え手から受け手へと一方通行的な意味合いが強いです。そこに対等な二項関係を表現しようとするれば、伝授と継承(Uberliefern und Übernehmen)と二語一語として表現するしかないのかも知れません。いずれにしても、西欧では技能訓練に関して、わが国の以心伝心的な丸ごとの伝承の営みの表現を寡聞にして知りません。ギリシアの昔から、テクネーの技能伝授には、装置(メカネー)や方途的(メタホドス)の科学知が先行し、アロゴスなテクネーとされた運動技能の伝承には、反論理的(antilogisch)な動感能力の発生分析に本腰を入れるには、西欧の合理精神が妨げになっていたのででしょうか。スポーツ科学における運動分析にしても、依然として精密な科学知(エピステーメ)の解明こそ運動分析の本道とし、それに一

方的に傾斜しているのが現状のようです。

しかし折角、わが国の運動伝承の表現が対等な二項関係の意味構造を蔵しているとはいえ、古来の芸道における自得精神のみを鼓吹し、へ偶然の伝承へないしへ自得による伝承へに甘んじているのは残念としか言いようがありません。運動伝承の実践現場には、鋭敏な動感能力に恵まれ、生徒や選手の運動感覚世界に共生 (*mitleben*) できる多くの勝れた運動指導者たちを見出すのにそんなに苦勞は要りません。そのような促発分析の能力に恵まれた運動指導者は珍しくないのです。ただ、そのような体育教師は生徒の人氣が高いのかかわらず、授業管理をおろそかにしたり、またそのカリスマ的言動のため、非科学的な変わり者のレッテルを貼られてしまうことも少なくないようです。さらに、運動発生の「受動的地平」 (*Horizont passiver Synthesis*) を先読みできる能力を持ち、積極的に動感能力の形成を促し、そこですばらしい成果を挙げているコーチがいるのに、それらの運動伝承の実践知を私の促発能力の枠内に閉じこめてしまうことも珍しくないので。つまり、へ私道へのレヴェルに安住してしまい、一向に国際的なへ公道化に向かつて、その理論構築に意欲をもつ機運に繋がらないとしたら、人間のもつ貴重な運動文化の伝承にとつて、これまた遺憾なことでもあります。運動実践の貴重な経験知を数多く持つて

いるわれわれ仲間が志を同じくして、ここに生きた実践理論としての運動伝承論を研究し、運動のへ創発能力への促発能力への発生分析と構造分析に向けて協力し合っていくことは、運動研究として極めて意味のあることだと思います。こうして、われわれの運動実践の衆知を糾合し、それを体系化して行くことができれば、われわれの発生運動学は大きく進展することでありましょう。それは、マイネルがその著のなかで、スポーツ運動学を發展させる基本的考え方だと述べていることと全く一致するのです (S.118f./120,121頁)。

しかしながら、このような運動発生を志向した運動理論は、すでに二〇世紀初頭から始まっていたことにも注目しておかなければなりません。たとえば、フランスの哲学者ベルクソンは、その運動論で、「今ここに流れつつある運動は絶対に分割できないのだ」と述べて、運動の純粹持続 (*la durée pure*) を取り上げて、それまでの科学的運動学の時間論に異を唱えたことはよく知られています。さらに、現象学の創始者フッサールは、その後期における発生的現象学において、「キネステーズ能力性」 (*kinästhetische Vermöglichkeit*)、つまり、動感能力の発生分析に先鞭を付けていることも特筆しておかなければなりません。特に、フッサールはそのへ間主観性論において、「伝達の現象学」 (*Phänomenologie der Mitteilung*; Hus. Bd. IV, S. 462ff.) として共

同体交信の発生分析をしているのが注目されます。そこで、フッサールのいう「伝達」(Mittlung)は、言語によって他者に語りかけ、他者が理解してその受け手になることを期待するという、いわば、「志向的行為」が意味されているのは贅言を要しないでしょう。その共同体における言語的伝達は、他者(受け手)への一方的な「自己移入」(Einführung)による働きかけだけでは、本当の交信が成立しないことを注意しています。たとい、伝え手と受け手が相互に「自己移入」を交換しあっても、そこには真の交信が成立しないと厳密な分析を示しているのです。そこでは、「私と君との結びつき」(Ich-Du-Konnex)という交信がその前提として求められ、「一つのわれわれ」(Wir-Einheit)の発生こそ「互いにもっとも密接な合致」(das innigste miteinander Eingeworden)を保証するのだと述べています。このことは、先言語的な運動実践における「原志向性」(Urintentionalität)の次元では、相互に動キネステーゼ感世界に住み込むことが求められ、「なじみの地平」(Horizont der Vertrautheit)における「私と君の結びつき」こそ不可欠になるのです。何となく、いつの間にか運動する状況になじみながら、居心地がいいと感じることの大切さは、運動習練の実践現場でよく分かっているのに、われわれはこれまで運動分析の対象に取り上げてこなかったのです。このような運動伝承の根源的な地平性への志向、つ

まり、運動発生の受動的な地平を運動分析の枠から弾き出してきたのは、精密科学的な運動概念しか承認して来なかったからでありましょう。いわゆる、フッサールの意味の原志向(Urintention)や方向不定の志向(unbestimmt gerichtete Intentionen; Logische Untersuchung, II, S.396)という受動的総合の地平構造は、指導現場では不可欠の前提なのです。しかし、それは現実に息づく運動現象とは全くかけ離れた、メンタルな問題として、あるいは、運動意欲を起こさせるマネジメント問題として絶縁的に取り上げられてきたようです。こうして、発生的現象学に基づく運動理論は、われわれの暗黙知としての運動伝承の難しさに貴重な方向づけを与えてくれることとなります。運動実践に足を踏まえたわれわれは、その豊かな有体的(leibhaftig)な経験知から、このことの重大さをよく知っているはずなのです。動キネステーゼ感能力のなかにおける新しいゲシュタルト発生を説明するには、その「受動的」地平への厳密な発生分析がなければ、われわれの伝承実践は十分に保証されるはずもないのであります。これらのことは、拙著『わざの伝承』の第六章「わざの伝承」(とりわけ11: 運動伝承の受動地平・12: 運動形態の形成位相)と終章「発生論的分析の道」を参照していただければ、理解を助けてくれると思います。

Ⅲ 伝承実践の諸問題

今日において、運動伝承の実践現場にどのような形成ないし再構成(修正)としての発生問題を見出せるのでしょうか。その詳細な内容的考察は、われわれの研究機関誌『伝承』創刊号の拙論「運動文化の伝承」ないし拙著『わざの伝承』第一章に譲りたいと思います。ここでは、運動伝承の問題性を5つにまとめ、その研究射程だけを粗略しておくことにしましょう。

(1) 日常動作のハビトゥス問題

フランスの社会学者マルセル・モースがわざわざラテン語で表した「ハビトゥス」(*habitus*)という意味内容については、拙著に詳しいので、ここでは「社会的に伝承されていく習慣的な動きかた」とだけ理解しておきましょう。われわれの日常生活において、長い間に習慣化されてきたハビトゥスにも、いつの間にか本質的な変容が起こっていることが少なくありません。もちろん、モースがそこで述べている拳を腰に当てて走るという一九世紀的走り方のハビトゥスの例証は、鋳型化された運動の最たるものとして、伝承価値をもちほしないかも知れません。ところが、不思議なこと現代の学校体育でも、その残滓が見られるのですからおもしろいものです。それだけに、われわれは大切な

運動文化としての日常的手わざを含めた運動形態の生成と消滅にはたえず観察を怠らないようにしなければならぬのです。一昔前までは、小学生が鉛筆を自分で削るという手わざは、当たり前前のハビトゥスとして伝承されてきたのに、今はすでにそのハビトゥスは崩壊しているようです。けれどもそれに代わって、鉛筆を指で器用にくるくる回すハビトゥスが関心を呼んでいる昨今ではあります。

とりわけ、運動感覚^{キネステゼ}の形態発生が極めて激しい様態を示す乳幼児期において、身近でそれに感覚共振的な関わりをもつべき母親や保育士は、運動ゲシュタルトの(形成位相)に特段の関心をもっているはずで、その人たちは、子どもたちの運動の発生分析と構造分析を適宜に行なえる能力をもち、適正な(運動形成)、つまり、運動感覚^{キネステゼ}図式の発生を、運動形成のプロとして、それをしっかり保証できるのでなければなりません。すでに、マイネル教授がその著において、乳幼児期の形態発生を論じているのは特筆に値するものです。それは数年にわたるモルフオロギー的運動分析に基づいた成果でありました。それは、バイオメカニクスの運動発達研究とは全く別種の類型学的構造分析であることは喋々を要さないところでしよう。たとえば、乳児の(こうゲシュタルト)を *Krabbeln* (這いずる)と *Kriechen* (高這う)に類型化し、その動きかたに鋭い形態発生の分析を施してい

るのはよく知られています。その動キネマティクス 感能力キネステティックが歩く形態、よじ登る形態、泳ぐ形態などに発展していく運動キネステティック感覚図式の構造論的なモルフオロギー研究は、発生運動学の独自の研究領野を構成しております。保育士や幼稚園教諭のように、乳幼児の先言・語動的な運動キネステティック感覚図式の発生に関わりをもたざるをえない人たちに多くの示唆を与えうることは喋々するまでもありません。

(2) 技芸・遊芸における動キネマティクス 感能力の伝承問題

音楽・美術・工芸の手わざのみならず、伝統的な能楽・歌舞伎や各種の遊芸、武芸、さらに現代のスポーツ・舞踊文化においても、そこで手足や体をどのように動かすかは、それぞれのわざの伝承にとつて基本的な関心事になるでしょう。しかし、それらの伝来の工芸や芸道では、これは当然のことではあります。その本来の芸術的な制作や表現が前景に立てられ、その基底を支えている動キネマティクス 感能力に関する発生様態の分析や解明、その発生方法論の開拓については、運動研究者(Bewegungsforscher)の問題意識を活性化するに至っていないのが現状ではないでしょうか。それは、運動を研究する人に、ヴァイツェッカーが意味している自然研究者(Naturforscher)しかないからなのでしょう。か、それともわが国古来の伝統的な自得精神が私たちにしつかり根

付いているからなのでしょう。か。芸道の自得の美意識それ自体は、運動キネステティック感覚図式の創発にとつて本質的なものであることに異論のあるはずもないし、決して蔑ろにできないことも当然のことです。しかし、自得精神の鼓吹だけでは、われわれの貴重な運動文化が絶えてしまう危険を孕んでいることも知らなければなりません。マイネル教授がエンゲルスの言を引用して、芸術制作を支えている運動伝承の営みに注目している達見は、運動伝承論にとつて極めて示唆に富む指摘なのです。すなわち、「人間の手は、ラファエロの絵画を、トルヴァルゼンの彫像を、パガニーニの音楽をあたかも魔法を使ったように出現させることができた」と述べて、すぐれた芸術的な制作や表現を根底的に支えている運動形成の不可欠性を指摘しているのです。

しかしながら、高度に発達したデジタルテクノロジーが日常化してきている今日においては、老練な職人のコツやカン、あるいは、天賦の才に恵まれた名手の驚異的なわざによって成し遂げられた完了態の所産だけが注目されやすいのです。それを精密科学的に分析し、そのデータに改良を加えて、名人上手以上のよいものを目指して、造り出そうと大童になります。「熟練技能をロボット化せよ」(NHKクローズアップ現代・2001.11.22)というスローガンのもとに、「科学技術による秘伝わざへの挑戦」を特集しているほどです。

そこで、さすがに国谷キャスターは、職人わざによる製品だけは先端的科学技術によって再生産可能になるとしても、「さらに勝れたわざを生み出す技能者の創発できる能力をどのようにして養成するのか」といみじくも本質問題を投げかけていたのです。このことは、驚異的なわざを生み出す名手や職人の、へ私のコツへやへ私のカンへなどのような動キネステシ感能力の発生分析こそ不可欠なのであり、それを伝承する方法論につなげるからこそ決定的な重要性もつことを示唆するものです。名人によつて創り出された結果としての作品の分析でなく、それを創り出す運動キネステシ感覚意識の地平構造の解明こそ、その創発能力を形成できる方法論を生み出してくれるのではないのでしょうか。それは、われわれの発生的運動学の研究射程においてこそ主題化されるべき独自の自な問題領域なのです。

(3) 運動障害における発生認識の欠落

心身障害者(Behinderten)あるいは病氣や怪我によつて運動障害(Bewegungsstörung)を起キした者の「運動改善問題」(Bewegungsproblem:MeinK.)に対応するのは、現時点では、医師や療法師の任務であり、その内容もほとんど医科学の領域に属しているのに異を唱えるはずもないほどです。いわば、障害や怪我のために、できない動作、できなくなつ

た動きかたの根拠と考えられているへ客観身体へないしへ対象身体へのなかに原因を探り、それを除去しないし補填し、常態に復元する仕事は医学的な専門領域に属するでしょう。われわれの問題意識は、そのへ常態へをどのように認識するかにおかれているのです。運動障害を起キす以前への回復をどのように考えるかによつて、その運動改善問題の方法論は大きく左右されることとなります。骨折それ自体は完治していても、もとの動キネステシ感図式に依然として障害が残っているときこそ、その対応にわれわれ運動指導者の独自の任務が期待されているのです。医師や医療関係者が、へ客観身体への復元は完璧だと太鼓判を押しているのだから、何の心配もないと言われるときから、選手キネステシの動キネステシ感世界に共生するコーチは、身の置き所のない切迫感に苛まれ、孤独な苦悩に襲われるのです。後は当事者の偶然の自得に丸投げするのを異としない医学関係者がほんとうに恨めしく思ったコーチは少なくともいいのではないのでしょうか。今年の秋場所で、一年四ヶ月にわたる怪我の治療生活の後、横綱として土俵復帰を迫られた貴の花の苦悩は、如何ばかりだったでしょうか。そのとき、かつての無敵の横綱における動キネステシ感図式をどのようにして再構成できたのでしょうか。動キネステシ感能力の創発分析と促発分析の専門家として、われわれは、「これにどのようにに交信し、処方していけばよいのか」という研究領

域をしつかりと確認しておかなければなりません。

一般的には、マイネルの意味する構築化(Konstruierung)としての運動認識に基づいて、動作をモザイク的に組み立てていくこととなります。そこでは、典型的な機械論的運動構築の方法論に従って回復が図られることとなります。運動障害を起こしている肉体的原因を除去すれば、元の正常な運動ができるはずだと考え、それでもできなければ、メンタル問題ないしマネジメント問題として対応するというように、古典的な二元論を踏襲するのが一般的でしょう。そこでは、その動作に要求される体力の回復とそのサイバネティクスのな制御機能の復元が目指され、機械論的運動理論が主流となってきます。運動指導の実践現場では、古くさい二元論では、とても逃げを打てない切迫感に苛まされているのが現実です。そのとき、蓄積してきた経験知に基づいて、運動の創発や促発を主題化する発生論的運動認識を取り上げているのは、老練な名コーチか、必死に選手の競技力復帰を願う熱意溢れる若い運動指導者だけでしょう。その他の多くは、有体的な運動世界には経験のない医療専門家に「おんぶにだっこ」となるか、選手本人に丸投げするしかないようです。そこにこそ、動キネシシ感能力発生論を主軸にした新しい運動伝承の営みが待ち望まれているのです。

ロムバッハの言うように、へ力動的構造(dynamische Struktur)を本質とする運動ゲシュタルトの修正や改善のための営みは、へ再構成(Rekonstruierung)を本質とするのであり、新しい運動図式は全体が一気に発生するのです。マイネルが一九世紀的運動認識として批判したへ構築化(Konstruierung)とフツサールのいうへ構成化(Konstituierung)とを混同してはならないことをまずもって確認しておく必要があります。こうして、われわれは運動障害を運動発生論の問題領域として、改めて運動分析の対象に取り上げることができることとなります。「部分動作をモザイク的に組み立てることはできない」と主張するシュトラウスの運動発生論に注目せざるをえなくなるのもこのためなのです。しかし、運動障害を運動分析の対象にした途端に、またしても分析論上の二元論的混乱に悩まされることになるのです。つまり、運動障害の実態を捉えるために、客観的な運動分析として、「運動記述法」(Motografie)や「運動現象記述法」(Phänographie der Bewegung)などが採用されるからです。そこでは、いずれも発生論的運動認識は背景に遠のき、法則原理に基づいたへ客観身体への運動分析に終始することになります。二〇年以上前に、ドイツのキップハルトらによって新しい統合的運動研究の構想が打ち出されたけれども、依然として一般理論が明確でなく、発生論的認識は前

景に立てられていないようです。われわれは運動障害をめぐる実践現場から浮上してくる運動改善問題を動キネステ感の能力発生的視座から分析に乗り出していく時に至っていると考えています。

(4) 学校体育の必修化問題

近年において、学校体育は大きな変革期を迎えているように思われます。一八七二年(明治五年)の学制改革で、初めて学校教育に参入した(体操科)は、翌年には(体操科)と改名され、それは戦時中の(体操科)から、戦後の(保健体育)へと名称変更があつても、長年にわたり、青少年の人間形成のなかで、知育・徳育・体育の一翼を担い、学校教育の必修教科として重視されてきたことは周知の通りです。ところが、近年における大学制度の(大綱化)に伴う大学の教育改革は、大学における保健体育の必修解除に動き出し、必修体育の意義が改めて問い直されることになりました。それに追い打ちをかけるように、小・中・高校の体育も、生涯スポーツを展望して(楽しい体育)を推進してきただけに、「なぜ体育は必修教科でなければならぬか」という本質問題を突きつけられる羽目になってきました。今回の指導要領の改訂で、ゆとり教育の名のもとに体育もその時間数削減を余儀なくされ、次第に人間形成の必修教科から選択

可能な単なる技能教科にされる可能性さえ生じてきています。すでに学校体育のなかでも、運動教材に大幅な選択制が定着し始めているだけに、人間教育に不可欠な感性教育を標榜する音楽・美術・書道などの選択問題と切り結んでくることになる可能性も生まれてくることになります。

近年におけるこのような学校体育の本質に関わる問題提起は、ドイツにおける三〇年ほど前の事情によく似ているようです。ドイツ体育の父ヤーン以来、地域社会におけるスポーツクラブ(Turnverein)の制度が一九世紀初頭から高度に発達しているのはよく知られています。それだけに、学校における体育の必修問題は、体育教科そのものの存在理由を問うものとして、十分な理論武装がなければならぬのは贅言を要しません。わが国のように、スポーツを楽しむ機会の提供や肉体の発育発達の促進という論拠だけでは、ドイツの世論が納得するわけもなかったようです。ドイツでは、体育の身体概念の基礎に現象学的な(両義性)を据えて、新しい人間学的運動学としての(身体性)(Leiblichkeit)の獲得をスローガンとして標榜したことはよく知られています。フランスの哲学者メルロ・ポンティは、この身体性(corporeité)を「最も本質的には私のからだで分かるのでなければ意味をなさない」と言います。そのためには「自らの運動を分析すること」(analyse du mouvement propre)である

といって、次のように説明してみせます。「身体を運動において考察することによって、身体がどのように空間のなかに(のみならず時間のなかに)住まうかもよく解るのであって、それというのも、運動というものは、空間と時間を単に身に蒙る(subj=支配を受ける)だけでは満足せず、それらを見ずから進んで身に引き受けるものだからであり、空間と時間とを既成の状況の平板す(Danaitis=Gewöhnlichkeit)のなかでは消え失せている、その根源的意味(signification originale)＝生身の私の身体)のなかで捉え直すものだからである」(『知覚の現象学』p.110-117頁)と述べているのです。

こうして、われわれの体育は、本原的(organisch)私の身体性において、つまり、「私が動くことができる」(Ich kann mich bewegen/verhalten)という運動感覚能力性の世界においてこそ、他の教科では代替できない独自の教育契機を生徒に提供できることとなります。そのような新しい人間学的な基礎を持つ体育を押し進めていくためには、このような運動^{キネステゼ}能力の発生様態を分析して、しっかり認識しておく必要に迫られるのです。われわれ現場の運動指導者にとつては、日常的にその豊富な経験知や実践知から当たり前のこととして、それらのことをよく理解しているのですが、ここに改めて、組織的、体系的に発生分析をすすめる、共通のフォーラムをもつことが焦眉の急になっていることを知ら

なければならぬと思います。

(5) スポーツ指導の分化問題

わが国における(スポーツ指導者)の概念は、スポーツ概念の多義性に呼応して、いわゆる(海綿語)になりやすいようです。それを競技スポーツだけに限っても、コーチ、トレーナー、フィットネスコーチ、インストラクターなどはその任務も競技によって区々であり、果ては、監督、部長などの表現も加え、それに(冠^{かんむり})の語をつけて、(冠コーチ)や(冠監督)として、その役割も指導への参加の仕方も多彩をきわめます。かつては、コーチというものは、いわば、一人芝居の名優でした。しかし、世界のトップに立つのには、スポーツ科学者や医師など多くの支援者の力を借りなければならぬ現状です。となると、コーチに求められる能力には、多くの専門領域に通暁している該博な知識と経験が要求されることとなります。

こうして、われわれコーチは、競技に勝利を収めるためのコーチングを効果的に進めるのには、マネジメント科学に立ち入り、体力トレーニングの生理学を学び、メンタル面の心理学的知見を広げ、疾病や怪我さらにドーピングの対応や栄養や衛生面まで広くスポーツ諸科学を身につけなければならぬようになります。加えて、選手やチームの競技力

の管理とチェックは常時求められるし、国際的な技術・戦術の情報収集とその分析を欠かすわけにはいかないのです。これがなければ、効果的な競技力の形成は、まさに海図のない航海を余儀なくされることになってしまいます。これらを効果的に統合し、有利に采配を振ることのできるコーチは、一体、どんな能力の持ち主なのでしようか。このように、コーチングの営みは分化と統合の方法論が問われているのであり、そのようなマネジメントコーチの養成の本質的な核になるのは、一体何であるのかが大きな問題として浮上してくることとなります。

しかし、そのようなマネジメントコーチの任務内容は、全て競技力形成のインフラ構造を支えているだけであり、現実に勝負をする選手ないしチームの競技力そのものを指導する営みではないのは多言を要しません。マネジメントコーチの存在は不可欠であるにしても、戦術を立て、新しい技術や戦術を編み出し、それを選手ないしチームの一人一人にまで血肉化させて、勝負を賭けていくコーチとは別な仕事なのです。このような現前する競技力を促発する役割を担うスポーツ指導者を「促発・コーチ」と呼んで、マネジメントコーチから区別することができます。牧歌的な時代には、マネジメントコーチも促発コーチも、コーチの一人芝居でよかったし、そのほうが全体のバランスがうまくと

れるという利点もありました。もちろん、この二つのコーチング内容は決して絶縁されているのではなく、相互にゆるやかに浸透しあっているのですから、そこには極性的認識が不可欠であるのはいうまでもありません。むしろ、いずれか一方に還元しようとして他を無視したり、あるいは、両方の任務をうやむやに平板化しないことこそ大切になるのです。

IV 運動指導者の独自の専門性

これまで見てきたように、日常動作のハビトゥス問題、技芸の伝承問題、運動障害の発生問題、体育の必修化問題、コーチの分化問題など、そのいずれの問題領域においても、運動形成や運動改善がその中核部をなしていることに注目する必要があります。この運動発生については、その運動認識の違いによっていろいろな問題が生じてくるのです。運動発生を運動形態の発生と理解するのはよいのですが、その運動形態を客観的時空系の運動図形の合成と理解してはなりません。われわれの発生運動学では、運動発生を私運動感覚の図式発生と捉え、その発生の生身の統覚プロセスを明らかにしようとするのです。伝承の伝え手、すなわち、指導者といわれる人は、いつも目標とする競技力や新しい運動感覚図式を統覚しようとする承け手の運動感覚

世界への潜入を図ろうとするのです。つまり、学習者に丸投げし、自得を強要してきただけの運動指導から抜け出そうと企図しているのです。学習者の動キネティック感世界を全く理解することもできないのに、その指導者は、勝手に運動の形態発生を指導できたと思いきんでしまうことに、われわれは慣れてしまっているのかも知れません。

しかしながら、そこで実際に何を伝えたのかと借問してみれば、それは習練の単なる手順であり、誰にでも当てはまる技術や戦術の教科書的な運動知識でしかなく、それを一方的に伝達してきただけなのかも知れません。学習者は、教師の受け売りのな指導にかかわらず、真剣に「私の身体」との対話を重ねて、自分なりのコツやカンに気づいていくのです。ほんとうに教えて欲しいと思っているコツやカンをその承け手に合わせて教えることを何一つしないで、まぐれで発生したのを我田引水して、その成功は指導者のお陰なのだと言い含めることは珍しくないし、周囲の人たちもそれを当たり前だと思っています。しかし、よく考えてみると、そんな個人的な運動意識の深層にあるコツやカンを指導できると思えないのかも知れません。しかも、都合のいいことに、そのような私の身体知は「本来的に自得すべきものなのだ」という古来の美意識が伝統的に受け継がれてきているのです。それは、生徒の深層意識の運動感

覚能力と対話できない指導者にとつては、まさに渡りに船なのであり、それを隠れ蓑にしない手はないのでしょうか。こうして、われわれ運動指導者は、コツやカンに関わる学習者の動キネティック感能力を育てるといふ、他のどんな専門家にもやれない独自の専門性を簡単に放棄してしまうことになりま

す。こんなに高度な情報化時代を迎えている現代なのですから、客観的な専門知識は、より理解しやすい情報として、それをうまく利用できるようにしてやればよいわけです。このような指導者の任務は、いわゆる「ビデオコーチ」で代替できるし、それどころか、世界一流のコーチによるソフトであれば、下手なトレーニングシステムを考える必要など全くないことになります。自得学習をさせるための一般的なコーチングの専門情報は、より勝れたソフトを選べば良いだけです。後は学習者の練習活動を監視し、親身になって応援、激励してやる位しか仕事が残っていないようです。単なる学習管理の監視者や、親身に励ましてやる程度の仕事は、ずぶの素人にもできますから、何も体育教師や競技コーチでなくてよいことになります。運動指導者といわれる人にしかできない独自の専門能力とは、一体何なのでしょうか。

われわれは、ここで個人の実存の深層意識に住む、もつ

とも根源的な運動感覚能力性、いわゆる動ける能力 (*nicht-bewegende bzw. nicht-verhaltende Vermöglichkeit*) の育成を指導する任務と、練習やトレーニング活動を管理指導する任務をはつきりと区別してみると、問題の所在が明るみに出てくるようです。つまり、これまでは、運動ゲシュタルトの発生指導と習練活動の管理指導が渾然未分の状態のまま混乱していたということが出来ます。これは *「Bewegung」* と *「Übung」*、*「movement」* と *「exercise」* がともに *「運動」* という一つの名辞ですべて理解してきたわが国だけの特殊な問題なでしょうか。

スポーツする生徒や学生たちの動キネステシ感能力の発生分析に対して、何ひとつ専門能力を持っていない体育教師は、たとえば、大学の必修体育における授業で他人にはできない独自の専門能力として何を主張するのでしょうか。誰にでも入手できる科学的な専門情報の一方的呈示、運動用具の管理・収納、学習時間のコントロールなどに終始していて、大学体育の専門教員の存在理由は問われないのでしょうか。身体活動に関する科学的、マネジメント的な専門領域は、それぞれの母体科学の進歩に依存しているし、スポーツはこれらの諸科学に研究対象を提供するだけで、その独自性を支える一般理論が成立しなければ、諸科学のモザイク的寄せ集め領域に過ぎません。スポーツ文化とその方法論は、

それぞれの母体科学の応用分野に位置づけられ、体育学ないしスポーツ学は学領域としての独立性を主張しえないことになるのではないのでしょうか。このことは、体育大学という指導者養成機関の教員組織に少なからぬ影響を及ぼすのであり、現在のところは、玉虫色の科学論に助けられているのかも知れません。

指導者のための運動分析論

I 発生論的運動分析とは何か

(1) 要求される分析能力

〈運動分析〉というと、そのときの〈運動〉は、対象物が客観的時間の経過と共に位置を変えることが意味されるのが一般ですから、一義的に精密科学的な運動分析に解釈されるのは、いわば常識的なことなのかも知れません。われわれはバイオメカニクスの運動分析やサイバネティクスの運動分析に馴染んできていますから、何もそれを異とするに当たらないわけです。しかし、われわれがここで発生論の立場から〈運動分析〉というときには、メルローポンティの厳密な表現を借りれば、運動性分析 (*analyse de la motricité*) と

いうことになりす。すなわち、へ私の身体へを基底に据えたへ実存の運動へ(Le mouvement d'existence)における運動感覚能力の分析を主題化しようとする発生論は、運動感覚図式の発生始源にまで遡って問いかけていくので、動キネステシ感能力のへ受動地平性へ(Horizont passiver Synthesis)における厳密な分析的解明も主題化されることになりす。

一般に、科学的運動分析は、精密なデジタルテクノロジーに支えられた精密な測定機器を用いることによって、数学的時空系における運動の客観的な分析結果を得ることができす。これに対して、発生論的運動分析は、へ私の運動へないしへ他者の運動への受動的発生の地平構造から、運動感覚を能動的に統覚していくプロセスにまで発生分析をすることから、分析に携わる運動研究者自身がすぐれた充実した分析能力をもっていないと、何一つ意味のある分析結果を得ることはできないことになりす。マイネルも指摘しているように、その分析能力は、運動実践の豊富な経験と鋭い動キネステシ感能力に基づいて訓練されていなければならぬのです。科学的運動分析は、医学やテクノロジーの研修をしつかり積んでいれば、特段にスポーツのすぐれた実技能力や運動指導の豊富な経験がなくても、有効な客観的な分析結果を生み出すことはできす。ところが、発生論的運動分析は、運動経験のないずぶの素人には、何も見つけ

出すことができないのです。

それは、ピカソの名画を見ても小首を傾げ、ワープロの行書と王羲之のしなやかな行書の違いも分からないのと同じことです。現前している動きかたの善し悪しの違いも分からず、その生き生きした現在にある運動を捉える根源的な感性に欠けているのではどうしようもないからす。例えば、「ひざが曲がった」とか、「しりもちをついた」とかいう素人でもその善し悪しが分かるような、へ姿勢欠点へから見分けられない体操のコーチは、へ感性質へ(aesthetische Qualitäten)と絡み合うへ技術欠点へを見抜くことが難しいから、その選手の運動発生や再構成に関わることが無理になりす。この頃は、コーチのみならず、演技の善し悪しを判断する審判員さえ、技の善し悪しが区別できなくなっているので、それは評定競技の成立を危険にさらしている由々しい本質問題ではありす。同様にして、ゲームにおける流れの意味構造を見抜けず、物体の複雑な位置移動としか目に映らないコーチに、球技の指導はとでもできはしないでしょう。運動実践の現場にいるわれわれのなかには、その人にしか見抜けない勝れた観察眼をもつコーチ、生徒の運動感覚にやすやすと潜入できるベテランの体育教師の存在は珍しいことではないはずす。しかし、そのような勝れた促発分析の能力は、これまでは信頼できない単なる主観

的な経験でしかなく、客観性に欠けた非科学的な戯言だと
して、スポーツ科学は一貫して排除してきました。それに
対して、四〇年以上も前に、堂々と反論の狼煙を上げたマ
イネル運動学の実践的意味はここにあったのです。その先
見の明に彩られた問題意識は、近年発見された遺稿集にも
明らかに述べられているのです。

このような指導者としての勝れた観察能力や交信能力な
どは、マイネルも指摘しているように、訓練可能性をもつ
ているのです。その訓練志向性をもつ人にとつては、最初
は曖昧でぼんやりしていても、「その情況に特に嫌な気がし
ない」という受動的運動世界にへなじみの地平〈Horizont der
Vertrauenheit〉が形成され、次第に運動感覚としてのへなじみの
知〈savoir de familiarité〉がそこに発生し、次第に充実されて
高度なわざとしてのへ実践知〈techné〉にまで結晶化していく
ことになります。いわば、科学的な運動分析が因果決定論
を基礎においているのに対して、發生論的な運動分析は目
的論(Teleologie)を基底に据えているので、この二つの運動
分析は全く別種のものなのです。ですから、それは一つに
還元されるべき性質の事柄ではないし、安易な融合を企図
されうるものでもないわけです。發生論的分析では、いつ
もテロス(目的)が前方に置かれ、その人の動 感能力は今こ
こで空虚であつても、「原志向性」の位相を経て、「求めて

止まない努力」(Begehrendes Hinschweben) によつて充実され
ていくという、フッサールの「運動感覚論」は極めて示唆
的なのであります。

このような目的論に貫かれた運動感覚論に基づく運動分
析というものは、主観的な動く感じといった、信頼できな
い単なる印象記述などではありません。その分析が普遍妥
当性を確保できるのは、私の生身にありありと有体的に与
えられる本原的なへ各私性〈Vemeinigkeit〉がそこに存在する
からです。つまり、それは、他者に決して代替できないへ唯
一性〈Einzigkeit〉を体験できる「各私性」が同一のへ絶対零
点〈absoluter Nullpunkt〉をもつ始源的なへ原身体〈Ureidb〉と
して、他者たちとの関わりをもち、共通の運動感覚世界を
構成できる能力性〈Vermöglichkeit〉が与えられているからな
のです。同じ動きかたの工夫をしている選手同士が相互にへ
間運動感覚で共振し、納得し、了解することは珍しいこと
ではありません。その動 感世界に住むことのできる能力を
身に取り込み、それを当たり前のよう身体化したときに、
始めてそこに客観的な認識が成立することになります。
それだからこそ、動 感能力の教育は習練(Uben)ないし
トレーニング(Trainieren)の領野においてこそ主題化される
ことになるのです。すでに述べたように、運動感覚身体の
深層意識との関わりは、学校体育における人間形成問題と

して、あるいは、競技スポーツの目標像に不可欠の意味をもっているのです。この意味において、相互に共通の動感能力を獲得した人たちにのみ共有できる客観性、いわば、間・キネステーズ的客観性(*interkinästhetische Objektivität*)に支えられている発生論的運動分析は、全ての人に例外なく、個人的能力などに関わりなく、客観的な情報を提供することになる科学的運動分析とは、本質的な異種性をもっていることとなります。この相互キネステーズ能力の明確な例証は、即興演奏や即興舞踊、ないし、対人競技の即興対応を挙げることでできましよう。物理的客観性と間身体的(*intercorporeität*)客観性の区別もつかないレベルで、不毛な対立や論議は避けられるべきでありましよう。

(2) 創発能力と促発能力

われわれの伝承理論における発生論的運動分析には、承け手ないし学習者の創発能力の発生様態を分析するへ創発能力分析論〈(*Bewegungsanalytik zur emergentischen Vermögenlichkeit*)と、伝え手ないし教師の促発能力の発生様態を分析するへ促発能力分析論〈(*Bewegungsanalytik zur mäandrischen Vermögenlichkeit*)とを区別することが出来ます。創発能力とは、自らの運動図式を統覚し、運動ゲシユタルトの発生にもちこむ学習者自身の運動感覚能力であり、そ

の能力の発生様態を知らなければ、教師やコーチは運動指導の一步も踏み出すことはできないのは当たり前前でことです。これまでは、生徒の体力を生理学的に診断し、心理学的に生徒のプロフィールを調査し、現有の技能チェックをするなど、マネジメントに関わる情報を収集するための分析が主流でありました。後は、運動実践の合間に、その個人の動く感じの鈍さとか、状況の変化を読む能力が特に鋭いとか、その個人のユツやカンの能力特性をランダムに収集していくのが一般でしょう。勝れた指導者は、その長い経験の間に、動感能力の特性を組織的に体系化していることが多いものです。ここでは、さらに一歩進めて、その承け手の動感能力の始源的な発生様態を体系的に分析しようとしているのです。ここにわれわれは、まづもって、創発能力の発生分析をしていく対象領域を特定しておかなければならないこととなります。すなわち、そこに最も始源的な発生を保証するへ体感能力と、へユツ創発能力とへカン創発能力とという能動発生の核となる二つの創発能力、さらに運動発生の始源と究極という極性的に発生様態をとらえるへ即興能力の少なくとも四領域は、ここで対象化しておかなければならないでしょう。

もう一方の促発能力とは、自らの運動ゲシユタルトを創発する能力ではありません。生徒の動感能力を組織的に育

て上げて、その図式発生を効果的に促せる能力であり、指導者に要求される運動感覚能力^{キネステイゼ}なのです。われわれは勝れた促発能力を身につけた教師やコーチを数多く挙げる事ができます。自分の実技能力は決して一流とは言えないのに、次々に名選手を育てるへ名伯楽^{メダリスト}のもつ促発能力というもの、多くの関心を呼んでいますけれども、これまで運動^{キネステイゼ}感能力としての運動分析の対象に取り上げられてこなかったのです。その名コーチの勝れた人柄やカリスマ性、豊富な経験知とその人並はずれた熱心さは取り沙汰されても、その専門的な運動^{キネステイゼ}感能力の構造はなぜか不問に付されてきました。指導者の促発に関わるキネステイゼ能力性は、従来の生理学的な^{キネステイゼ}運動能力への枠に入らないから、せいぜい「指導者論」としての論考にまとめられる程度でした。われわれの発生論的な運動分析では、当然ながら、生徒たちの運動^{キネステイゼ}感図式の統覚を促進できる重要な促発能力として、発生分析の対象に取りあげることになるわけです。指導者に不可欠な促発能力の構造も解明されず、それがどのようなにして発生し、充実にいくのかも分析されてなくは、体育大学の指導者養成のカリキュラムは目標を立てられないはずもないこととなります。ですから、もっぱら学生自らの実技能力をつけることが促発指導もできるようなると信じられてきたのです。そこには、実技こそ最も大

切な必修単位だったのではないのでしょうか。しかし、ニュースポーツも含めて、経験させる種目が増加し、その要求レベルが問題になるにつれて、本質的な反省を求められるようになってきたのです。

これまでのように、各種のスポーツ種目の実技を一通り体験させ、ある程度の技能チェックをしても、それでは、創発能力の上辺だけのなぞり、ないし、つまみ食いではなく、肝心の指導者のための促発能力の理論的体系化も、その方法論の実習も不問に付されたままに放置されてきたのです。そこには、「できれば教えられる」という苦むした運動伝承論がまだ息づいていたようです。依然として、実技に技能ノルマを課すだけの体育大学も少なくないのではないのでしょうか。しかし、この促発能力の養成プログラムは、実技のマネジメント的指導方法、つまり、授業展開の方法や指導手順、あるいは、技術や戦術の段階的指導法を意味しているわけではありません。そこで訓練されなければならぬのは、指導者自身が私の^{キネステイゼ}運動感能力として身につけなければならぬ促発能力なのです。われわれは、そこに生徒の今この運動を即座に観察できる運動^{キネステイゼ}感能力、すぐれた^{キネステイゼ}運動感能力によって生徒や選手とコミュニケーションできる^{キネステイゼ}交信能力、できない生徒の代わりにコツやカンを掴んでやれる^{キネステイゼ}代行能力、さらに、それらの感覚素材を承け手

に戻してやるための処方能力という、少なくとも、四つの領域を区別しておかなくてはなりません。

II 促発能力の体系

(1) 観察能力

(kinästhetische Beobachtungsvermöglichkeit des Sich-bewegens (-verhaltens))

これは指導者が自らの動キネステゼ感能力を駆使して、学習者との運動感覚キネステゼの通信路を開き、学習者の感覚意味構造を読むことができるといふ、いわば、運動感覚的な観察能力なのです。だから、向こう側に見られる計測可能な図形の継起的運動を科学的分析のように定量化して考察するものではありません。大切なことは、そこに何を読み解くのか、何を情キネステジオリギー況から見分けるのかです。それは運動感覚論的な解釈学を基底に据えた観察の運動感覚能力なのです。そこには、以下の三つの観察能力が求められますが、詳しくは拙著に譲りたいと思います。

① テキスト発見能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zur Heuristik des Beobachtungstextes)

② 対私的意味構造の観察能力

(kinästhetische Beobachtungsvermöglichkeit der auf Sich-bewegen intendierten Sinnesgestalt)

③ 情況的意味構造の観察能力

(kinästhetische Beobachtungsvermöglichkeit der auf situatio Sich-verhalten intendierten Sinnesgestalt)

(2) 交信能力

(kinästhetische Vermöglichkeit der Kommunikationen mit zweistimmiger Resonanz)

これは学習者が運動感覚能力を図式化していくプロセスというものを、指導者として有体的に、つまり、キネステゼ動感身体として理解するためのものです。指導者のもつ運動キネステゼ感能力によつて学習者のそれに△・二声で△(zweistimmig)共鳴しながら、学習者の運動感覚世界に潜入し、その運動感覚を図式化し、つある世界の情報収集できる能力です。同時に、学習者の運動感覚的な交信能力を育てていくための、指導者の促発能力もここに含められます。ここでは、三つの交信能力を区別することができます。

① 共鳴能力

(kinästhetische Vermöglichkeit mit zweistimmiger Resonanz)

② 先行理解能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zum Vorverständnis des Bewegungstextes)

③ 借問能力

(kinästhetische Vermöglichkeit des Antiphrens mit übersetzenden Fragen)

(3) 代行能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zur stellvertretenden Schematisierung der Sinnesgestalt)

これは指導者が学習者の運動感覚世界に住み込み、その身になってコツやカンを掴むことができるという、学習者に代わってその運動感覚を構成化できるといふ指導者の運動感覚能力です。古来の自得の美意識からは、本質を見誤った、余計なサーヴィスだと非難されそうなおも知れませんが。しかし、それを潜勢的代行に成功することと、それを学習者に何時、どんな状況で与えるかというへ処方能力とは区別されるべきであり、別問題なのです。そこでは、二つの代行能力が求められることとなります。

① 住み込み能力

(kinästhetische Vermöglichkeit mit Sich-einwohnen zur kinästhetischen Welt des Anderen)

② 代行達成能力

(kinästhetische Vermöglichkeit mit Gelingen der stellvertretenden Schematisierung)

(4) 処方能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zur Rezeptierung)

これは学習者が運動感覚図式の発生に成功するために、直接的な処方内容を学習者に戻してやる能力であり、指導者の決定的な能力と言えます。この処方能力はマネジメン卜的な指導方法論への移行領域に属するのですが、あくまでも運動感覚論としての独自性を失っては意味がなくなつてしまいます。そこには、以下の三つの能力が求められます。

① 道しるべ設定能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zum Rezeptierungsentwurf der Meta-hodos)

② 運動感覚呈示能力

(kinästhetische Vermöglichkeit zu den Rezeptierungsanweisungen)

③ 促発開始能力

(*kinästhetische Vermöglichkeit zum Ansatzpunkt der mündlichen Arbeiten*)

ここに挙げた四つの促発能力のうち、観察、交信、代行の三能力は、運動指導者の基本的な促発能力ですが、最後の処方能力は統合的な意味構造をもっているのです。それは、有効な促発のための運動感覚的な素材(ヒューレ)として収集したデータを学習者のパーソナリティや生徒の動感能力(レヴェル)に合わせて処方し、その成果を本人にへ戻して、(recipere)やれるかどうかという、いわば、運動分析の成果を実現できるかどうかの決定的意味をもっているのです。

この処方能力こそ実践経験の豊かな教師やコーチの腕の見せどころなのです。このように貴重な指導能力は、指導者の運動感覚能力という認識が欠落していたようです。ですから、これまでその促発能力の決定的意味を持つ処方能力は、その発生分析の対象になってこなかったのです。あるいは、単にマネジメントに長けた教師としてその運動感覚論的な本質が見過ごされてきたようです。ですから、その個人のもつ促発能力という実践知は、そのまま墓場に葬り去られてしまい、伝承は成立していないことになります。いわば、その指導者の一代限り横綱のような個人

技能なのです。「私道から公道へ」のスローガンを掲げて、ここでもわれわれの伝承論の不可欠な役割を確認しておくなければなりません。

最後に一言付け加えておきたいのは、この四つの促発能力が指導者の必須の能力であることは言うまでもないのですが、同時に、指導者に恵まれない学習者にとっては、特別な意味をもつことになります。いわば、無師独悟せざるをえなく、偶然の自得を余儀なくされる独習者は、自らの創発の営みの外に、自分のなかにへ他(アルクレーユ)我としての指導者を持ち、そのへ他我コーチによる促発の営みが顕著なのです。

このことは、コーチなく独り苦心して技を身につけた人が勝れた指導力をもつという例証に事欠かないことから首肯できるでしょう。競技力の拔群な名選手は、往々にして、その技能レヴェルが高すぎると、結果的に自得にならざるをえないのです。当然ながら、自らのなかに住むへ他(アルクレーユ)我というハイレヴェルのコーチが自分のわざの創発に連れだつて遅く育つことになるのです。この意味における創発と促発の二面的意味構造を自覚した場合にのみ、名選手が名コーチになる可能性が生まれることとなります。同時に、運動形成の(図式化位相)における統覚能力に恵まれず、多變的な図式化体験をもった、いわゆる鈍い選手にも、自らのなかに勝れたへ他我コーチを育てるチャンスは与えられ

ているのですから、当然ながら名コーチになりうる可能性をもつこととなります。

Ⅲ 指導者に求められる創発能力の発生分析

運動指導者がその必須的能力として求められる促発能力を發揮する場合に、その指導者が分析の対象にするのは、学習者の動キネステシ感能力ですから、それがどのように発生しているのかという様態を予め承知しておくことがたいせつです。たとえば、観察能力を發揮するにしても、学習者のどの創発領域の、どの形成位相に位置しているのかを明確にしておかないと的はずれの観察になりかねないからです。そのためには、学習者の錯綜した創発能力を体系的に四つに分けて認識しておくことが大切です。さらに、それぞれの発生分析の対象を運動形成の位相毎に確認しておく必要があります。因みに、運動形成の五位相は、「①原志向位相」、「②探索位相」、「③偶発位相」、「④図式化位相」、「⑤自在位相」に区別できますが、それは時間の都合で割愛するしかありません。拙著『わざの伝承』における第六章、12（運動形態の形成位相）を参考にしてください。それは、まだ学習者自身が気づかないような受動的・発生のへ地平構造を視野に入れて運動を観察し、さらに能動的に運動感覚を統覚

していく位相、すなわち探索、偶発、図式化、自在の諸位相のいずれにあるのかを予め見抜いて考察していかなければなりません。ですから、例えば、選手の遠近体感能力がまぐれの偶発位相にあるのか、それとも図式化位相として観察するのでは大きな違いが生じてしまいます。ここでは、創発能力の四つの分析対象領域とその動キネステシ感能力の内容項目を列挙しておくだけになりたいと思います。詳しくは拙著『わざの伝承』終章の「発生論的運動分析の道」を参照してください。

(1) 体感能力

(*kinästhetische Vermöglichkeit des aktiven Koästhetischen*)

- ① 零点体感能力
- ② 遠近体感能力
- ③ 気配体感能力

(2) コツ創発能力

(*kinästhetische Vermöglichkeit des Konstruierungsgefühls*)

- ① 直感能力
- ② 予感能力
- ③ 統覚能力
- ④ 時空的修正能力

- (調和化能力、局面化能力、再認化能力、優勢化能力)
- ⑤ 力動的修正能力

(リズム化能力、伝動化能力、弾力化能力、解消化能力)

(3) カン創発能力

(*kinasthetische Vermögichkeit des statuen Gefühls*)

- ① 伸長能力(徒手伸長能力、付帯伸長能力)
- ② 先読み能力(偶発即応先読み能力、情況即応先読み能力)
- ③ 情況把握能力(情況意味把握能力、情況感把握能力)

(4) 即興能力

(*kinasthetische Vermögichkeit der Improvisation*)

- ① 原初即興能力
- ② 自在即興能力

(即興能力の構造的特性について、一言付け加えておきたいと思ひます。この即興能力は、体感、コツ、カンのもつ3つの創発能力のそれぞれの始源的發生様態を示している一方で、それらの究極的な創発能力の次元へと開かれて行き、大自在の即興能力に至るといふ極性認識を必要とするのです。)

以上見てきたような(促発能力)と(創発能力)は、運動伝承の指導実践の世界では、何も目新しいことではありませぬし、運動指導者にとつては極めて日常的なこととさえあるのです。勝れたコーチや体育教師は、これらの發生分析は当然のこととしてすでに実践してきていると思ひます。ただ、これまでの一義的な科学的運動分析の呪縛が強すぎ、実践現場では当たり前に行われている發生分析が正統な分析論として評価されてこなかっただけです。つまり、そのような指導者の必要な能力というものが、現象学的、形態学的な運動感覺論キネステジオロギに貫かれた運動分析論、メルロ・ポントイの言葉キネステジオロギを借りれば、「運動性分析」の理論だと認識していなかったただけなのです。運動指導者に不可欠なこれらの促発能力と創発能力の發生論的運動分析は、因果論的な科学的運動分析と明確に区別されることは再三言及してきました。それは目的論的原理に基づいて、(運動感覺論キネステジオロギ) (*Kinasthesiologie: Kinasthetik*)を基底に据えた現象学的、形態学的、解釈学的な運動研究として、運動伝承論を大きく支えてくれることになりました。マイネル教授がその唯一のライフワーク『運動学』の随所で標榜していますように、われわれの実践現場に埋もれている貴重な実践知、私的な運動感覺知を単に個人的な方法論のままに放置してよいわけがありません。この私道をわれわれ仲間キネステジオロギで踏み固めて、

より多くの仲間が歩ける公道、さらに国際的な公道へと切り拓いていくことが大切ではないでしょうか。

今こそ、運動実践の現場にいるわれわれ運動指導者、運動研究者が一致協力して、貴重な運動文化を正統に伝承できるように努力していききたいと思つて、運動伝承研究会の発足にこぎ着けた次第です。皆さまのご理解とご協力によつて、われわれ個々の運動感覚知が踏み固められて、私道から公道へと、われわれの運動感覚発生論が運動学の一般理論へと発展しうることを切に願ひして、私の基調講演を閉じたいと存じます。ご静聴ありがとうございました。